

● シリーズ 私の見た日本 Vol.182

昔今の台湾・日本建築を巡る

郭 羽揚 (カク ウヨウ)

中華民国台北市出身。
2010年中国科技大学建築学科卒業。2013年日本工業大学留学生別科卒業後、同大学院建築デザイン専攻学科入学、2015年修了。同年同大学勝木祐仁研究室協力研究員。
2016年より佐藤総合計画勤務。



日本で過ごしたこと

私は2010年に台湾の中国科技大学建築学科を卒業し、1年の兵役を終えた後(台湾では2018年まで徴兵制度がありました)、2012年に提携校として交流のある日本工業大学に留学しました。それから8年を日本で過ごしてきましたが、留学から日本企業に勤めるなかで感じたことを本稿で述べたいと思います。

最初に驚いたのは、不動産会社でアパートを探す際の日本の賃貸住宅に関わる法律やルールなどについてでした。まず、入居の初期費用として、敷金、礼金、仲介手数料、火災保険料、保証人の確保や契約更新の手数料など、一回の契約で必要になる金額が多いことです。これは家賃の6カ月分が目安と言われているようです。近年、施工不備問題でも話題になったレオパレス21のように、敷金や礼金がない物件もあるようですが、自分で物件を探したときにはそうした驚きがありました。

それらの法律やルールには関係者や入居者を守る目的があるのだと思いますが、日本人がものを大事にすることも関係しているのではないかと思います。ただ、初めて日本に来て住まいを探す外国人にとって、こうした仕組みは難易度が高いように感じられました。台湾の場合、賃貸住宅を借りるには2つの方法があります。一つは大家さんが不動産会社に仲介を依頼して不動産会社を通して契約す

ること、もう一つは大家さんと直接交渉することです。日本では大家さんが不動産会社に媒介・仲介を依頼する場合は圧倒的に多いように思います。それに比べ、台湾では大家さんとの直接交渉が結構な割合を占めます。さらに、大家さんにもよりますが、初期費用は家賃1、2カ月分の敷金ぐらいで、礼金、火災保険料、契約更新料は基本的にはありません。そのため、外国人でも好きな部屋に簡単に住めると言えるでしょう。

近代建築(日本と台湾のつながり)

次に、台湾と日本の建築について感じたことを述べます。

台湾における建築の様式は近代を迎えるまで、はっきりしていません。台湾島自体は、16世紀の大航海時代のオランダやスペインによる短期間の領有があり、その後、鄭成功による政権を経て清朝に統治されてきました。こうした多様な文化が混ざり合っていたため、台湾建築には独自の特徴や様式は見だしにくいと言えるのかもしれない。

こうした背景から、台湾の建築の歴史は、日本の統治下にあった1895年の近代建築から始まったものと言えると思います。もちろん、植民地政策によるマイナス面もありましたが、日本の南進政策により、台湾の都市計画、建物、医学、鉄道などがそれまでになく発展したのは事実ではないでしょうか。

1911年8月末、台湾は強い台風に見舞われ

ました。台北は洪水に見舞われ、多くの伝統的な家屋が倒壊しました。台湾総督府はそれを機会に市区改正を行いました。台湾の都市計画の特徴は、ヨーロッパの大都会を参考にし、バロックと啓蒙時代の幾何形態や空間構成のコンセプトを用いたことです。台湾の近代建築は大きく3つの時代に分類されます。最初は1930年代以前の「様式建築」、2つ目は「過渡期建築」、最後は1930年から1945年までの「現代建築」です。様式建築を代表するのは現役総督府(旧台湾総督府)や西門紅樓(旧市場八角堂)、台湾大学医学院付属医院(旧台北帝国大学付属医院)などで、現代建築では台北郵局や台北中山堂などがあります。これらは辰野金吾のもとで学んだ森山松之助や近藤十郎、長野宇平治ら日本人建築家による設計が中心でした。このようなことから、台湾と日本の建築のルーツは深くつながっていると言えるでしょう。また台北中山堂では、当社の創設者である佐藤武夫が音響設計に関わったという話があるそうです。

近代からモダニズム建築への変化

その後、関東大震災でレンガ造の建築が大きな被害を受けたことから、日本は歴史主義的な装飾を用いた様式建築を否定するようになりました。そして、戦後の復興と高度経済成長により、合理的で機能的な造形理念に基づく建築、つまり工業化により大量生産され

た材料、例えば鉄筋コンクリートや鉄、ガラスの使用が一般的になり、モダニズムの公共建築が建設されるようになりました。

前川國男や丹下健三、坂倉準三、そして若い世代の建築家たちが世界的な評価を得て、日本の現代建築のレベルを向上させたのだと思います。

一方、第二次大戦後に晴れて独立を勝ち得た中国は、国民党と共産党の内戦を経験しました。国民党は内戦に敗れ、蒋介石率いる中華民国政府は台湾に撤退し、日本の植民地時代に建設された官庁などの建物を接収してそのまま使用しましたが、大陸から多くの人々が移住してきたこともあり、新たに建造された建物も数多く存在します。例えば、1952年には中国の建築様式を取り入れた台湾を代表するホテル、圓山大飯店が建設されました。その後、1963年には台中市の東海大学キャンパス内に、台湾で初めての外国人建築家の作品として中国系アメリカ人建築家イオ・ミン・ペイによる路思義教堂が完成しました。室内に柱や梁がない、三角形の特徴的な教会堂の形状は、中国の伝統的な建築様式である四合院の様式を取り入れた校舎群と好対照をなしながらキャンパスを構成しています。私は、この2つの作品などから台湾の現代建築が始まったのだと思います。

そして、1999年9月21日、台湾は大きな地震に見舞われ、首都台北でもビルが倒壊し多くの死傷者がでました。その後、政府は深

く反省し、施工手法や構造、材料に至るまで、全面的に建築規則を改めて検討し直して今日に至ります。

21世紀に入った現在は、李祖原による台北101や九典聯合建築師事務所が設計した台北市立図書館北投分館、宜蘭にある姚仁喜の蘭陽博物館、そして黄聲遠のフィールドオフィス・アーキテクツによる宜蘭のまちづくりなど、建築だけではなく、都市のランドスケープも地元建築家によって進められています。

さらに、国際コンペによって海外の建築家の作品も増えています。台中国家歌劇院を手がけた伊東豊雄を代表とする日本人建築家のほか、最近では、オランダの設計事務所、メカノーが手がけた高雄の衛武营国家芸術文化センターが大きな評価を得ています。

これからさらに、台湾の都市スカイラインやランドスケープにも多様な変化が期待できるでしょう。

これからの建築の進み

社会人になって4年、私は主に公共建築のプロジェクトに参加してきました。市民ワークショップや説明会を経験し、公共建築はランドマークというだけでなく、市民の生活や文化に深く関わるものであり、心の誇りになるものだと考えるようになりました。設計者の立場で、新たな建物は周辺にどう印象を与えられるのか、市民の関心をどう設計手法で反映できるのか、難しいかもしれま

せんが、一番大事なこととしてチャレンジしていきたいと思います。

また、台湾と中国の国際コンペにも参加しました。台湾の領土は広くないので、設計の条件も厳しくなります。ヒューマンスケールと自然の調和は重視されています。例えば、建築材料の使い方によってどこまでエコ環境をつくってあげられるのかなど、建築はただのシンボルではなく、自然環境との調和が必須になっていると感じます。経済的に急速発展している中国でも、都市間競争で各都市は自分らしさを生み出すことに腐心していますが、自然環境を重視する点においては共通しています。

私にとっては、近代建築から現代建築に至るまで、建築は美しく、人に対する合理的で機能性の高い空間を提供する芸術品だと思っています。時代と文化によって重視されるところが変わっても、われわれ人間と建築の関係は変わらないでしょう。21世紀の今、テクノロジーが急速発展し、やがては建築にもAIなどが導入されるかもしれません。それらの先端的な技術と建築を組み合わせ、どうイメージを人々に与えるか、われわれ設計者に与えられた重要な課題だと思っています。

